

東京納税貯蓄組合総連合会 会長賞

「税金で繋ぐ命と笑顔」

足立区立花保中学校

三年 増田 涼風

私が小児急性脳症を発症したのは、小学二年生のときだった。インフルエンザによる高熱が続いていたある日、母が私の異変に気づいたときには、すでに意識がなく体が痙攣していたという。私はすぐに救急車で総合病院に搬送され、迅速な処置のおかげで、一週間の入院を経て無事に退院することができた。

今振り返ると、当時の私は精神的にも金銭的にも両親に大きな負担をかけてしまったのではないかと申し訳なく思う。そこで、母に「私の入院費用はいくらくらいだったの？」と尋ねると、

「食事代くらいしかかからなかったよ。」

と笑顔で答えてくれた。私はその言葉に驚き、なぜそんなに安く済んだのか不思議に思った。

調べてみると、日本の医療制度や税金が深く関わっていることが分かった。私が住む足立区には「子ども医療費助成制度」があり、高校生までの保険診療の医療費が無料だった。この制度の自己負担分は税金で賄われているため、私の入院費用も実質無料だったのだ。さらに、救急車の運用費用も税金で賄われていると知った。あのとき私が助けられた背景には、税金が大きな役割を果たしていたのだ。

これは決して当たり前ではない。例えば、アメリカでは救急車や入院の費用が税金で賄われておらず、高額な自己負担が必要な

場合が多い。調べたところ、アメリカでは救急車の利用だけで十万円以上、入院費用は数百万円に上るケースもあるという。もし私がアメリカに住んでいたら、両親は私の治療のために多額の負担を強いられていたかもしれない。そう考えると、日本の子ども医療費助成制度や税金で支えられた救急車システムのありがたみを強く感じる。

しかし、こうした制度は地域によって異なることも知った。足立区のように高校生まで医療費が無料の地域もあれば、対象年齢や所得制限が異なる自治体もある。それでも、日本全体で子どもの健康を守る仕組みが整っていることは、家族にとって大きな安心につながっている。あるとき私が無事に回復できたのは、優れた医療技術だけでなく、こうした公的支援の存在があったからこそだ。

今、私は中学生として元気に生活できている。これまで税金について深く考えたことはなく、どちらかというとネガティブなイメージを持っていた。しかし、今回の経験を通じて、医療費だけでなく、災害復興、通学路、教科書、さらには給食や公園の整備など、税金が身近な場面で役立っていると分かった。

税金は、私たちの生活を支え、いつも誰かの笑顔を生み出しているのだ。私はまだその恩恵を受けるばかりだが、これから税金や社会の仕組みについてもっと学びたい。そして、あるとき税金に救われた私のように、納税を通して多くの人々の未来の笑顔を守り、将来は社会に貢献できる人間になりたいと強く思う。